

東京納税貯蓄組合総連合会会長賞

「優しさに国境なし」

足立区立 第四中学校

三年 服部 咲菜

私の父はインドネシア人だ。父は数年前から腕が上がりなくなり、手や足の筋肉がなくなっていった。あまりにも腕が細くなってしまうたので病院で検査をしたら、指定難病のひとつだという診断が出た。それから、一時は入院したのだけれど、毎月五日間の点滴をしなければならなくなり、会社を休んで通っていた。会社を休み続けることもだが、日常生活にも支障が出てきて、とうとう仕事を続けられなくなり会社を退職することになってしまった。

あれから二年、今も点滴は続いている。点滴は一回につき十五万円ほどかかり、かつ入院代も高い。それなのにどうしてこんなにも点滴を続けられるのだろうと疑問をもち、母に話を聞いてみたら、国からの援助があり、自分たちで負担するお金が少ないからできるのだと教えてくれた。そしてその援助が、税金から賄われていることがわかった。

税金の大半は医療、介護、子育てなどの社会保障に使われている。今まで自分たちが、払ってきた消費税は人々の援助に使われていることを知った。

ただ、私にはその援助が綺麗事のように感じ、マイナス面が沢山思い浮かんでいた。物を買ったら、消費税がかかって高く

つく邪魔なものだと思っていたし、そこに住むだけで税金を払わなければいけないのも納得できなかった。また、税金の種類は多く、法人税や相続税、たばこ税などなんの税なのか区別がつかないものもあった。しかし、身近に考えてみたら良い面もあることに気がついた。

私達子供には医療証というものがあって、病気やけがをして病院へ行くと、区が一部を負担してくれる。父は難病で毎月手当をもらい、難病の医療証で高額な医療が抑えられていた。障害者にはタクシー券が支給されるらしい。

私が一番驚いたのは、父が外国人でありながら、日本人と同じように国は援助してくれていることだ。父は日本に来て病気になったことを感謝していると言っていた。なぜならインドネシアのような国では、税の仕組みはあっても国民から税金を徴収するのが難しいからだそうだ。日本の納税環境が整っているからこそ、医療援助などの活動ができるのだろうか。もし父が外国人でなく、病気になっていなくなったら、この税の仕組みに気付くことができなかつたのかもしれない。今まで損だと思っていた気持ちもこれからは、自分が少しでも役に立っているかもしれない、自分もこの税のおかげで助かっているんだという肯定的な考えを持った大人になる為に、社会に存在する税の仕組みに向き合っていきたい。